

ハントケに於けるGerechtigkeit

狩野 智洋

1. 序

ハントケは「ドナウ川、サヴァ川、モラヴァ川、ドリナ川を巡る冬の旅—セルビアに対する公平」(Eine winterliche Reise zu den Flüssen Donau, Save, Morawa und Drina oder Gerechtigkeit für Serbien)¹⁾に於いて、西側ジャーナリズムのクロアチア・ムスリム人²⁾寄りの偏向報道を厳しく非難している。ユーゴ紛争に関する欧米の報道が偏向している点は、日本のジャーナリズムに於いてもしばしば指摘されてきた。³⁾問題は、ハントケがジャーナリズムを批判しながら、自らはセルビアの日常的な個々の事例

*本稿は1997年3月6日に湯が島で行われた第29回ドイツ現代文学ゼミナールで口頭発表した原稿に加筆したものである。

1) Handke, Peter: Eine winterliche Reise zu den Flüssen Donau, Save, Morawa und Drina oder Gerechtigkeit für Serbien. 3. Aufl. Frankfurt a/M. (Suhrkamp) 1996.

(以下 Reise と略記)

2) かつて1983年から6年以上にわたってベオグラードに駐在した経験を持つ日本人フリージャーナリスト千田善氏によると、ムスリム人とは、単にイスラム教徒を指すのではなく、「<セルビア・クロアチア語を話すイスラム教徒>で、独自の民族」であると言う。

千田善:『ユーゴ紛争—多民族・モザイク国家の悲劇—』講談社現代新書 1993. S.156

3) 千田氏はユーゴ紛争でのマスコミに対する各派の対応に関し次のように報告している。「一方、[クロアチア]当局はアメリカなどのクロアチア移民組織から青年男女を呼び寄せ、プレスセンターで外国報道陣の対応に当たさせた。当然、欧米のメディアが露骨に優遇され、その効果はあったようだが、日本の記者たちは<差別された>と怒った。[...]セルビア対クロアチアの<マスコミ情報戦>は、とくに初期にはクロアチア側が優勢だった。原因はクロアチアに比べて、セルビアと連邦軍側があまりにも不器用だったことだ。[...]戦場がセルビアの外だったことも大きい。クロアチア側に地の利があった上、カメラマンたちは危険地域で、文字どおり命がけの撮影を続けた。情報戦で出選れた連邦軍はマスコミを敵視し、クロアチアや外国のカメラマンを粗い撃ちした。[...]クロアチアでは、国营テレビと外国のテレビ・クルーが<同業のよしみ>で、危険な戦場からもち帰った映像を提供しあった。セルビア側はカメラマンが戦場近くにいないため、自分の局のニュースでも、<敵>の映像を使用せざるを得なかった。当時は、旧ユーゴからの欧州放送機構(ユーロビジョン)向けの電送施設がザグレブ一カ所だったことも災いし、セルビア側は<自前>の映像を外国に提供することが難しかった。」

前掲書、S.228ff.

を描いたに過ぎない旅行記を書くに留まっている、という点である。そこから次のような批判が生じるのも当然である。「政治的な分析を加えて真実を個人的に追求することを、始めに約束している。そして読者は、ペーター・ハントケがこれまで知られていない証拠を挙げ、自分自身が発見したことで、自分が行った分析を根拠付けるのだらうと思う。だが彼の約束の言葉に続くものは単なる個々の事物の描写であり、一人の旅する作家の印象である。」⁴⁾ハントケは確かに、「93年2月、サラエボ入りした。前線を越えると、セルビア人の家が砲撃され、子どもたちがばたばたと死んでいた。電気も水道もない。欧米の報道がく侵略者>ととらえていた側の子どもたちだ」⁵⁾というような、日本のジャーナリストが伝えているセルビア人側の被害の生々しい現実を報告してはいない。彼が何故、*Gerechtigkeit für Serbien* を宣言した本の中で、読み方によっては全く無内容とも思えるような事柄を書くに至ったのか、また、ここでのハントケに於ける *Gerechtigkeit* とは一体如何なるものなのかを考察したい。

それを論じるに当っては、先ず、彼のジャーナリズムに対する批判を他のテキストをも参照しつつ概観し、ジャーナリストとは異なるハントケの立場を明らかにすることから始めたい。

2. ジャーナリズムの画一的視点と世論操作

ハントケはかつて新写実主義(*Neuer Realismus*)⁶⁾の言う現実を批判してこう述べている。「[...]しかしその際この見解の言う現実とは、当地

4) Šnajder, Slobodan; von Becker, Peter: Handke und der Krieg. Die Mörder sind unter uns. In: Theater Heute. 4.1996. S.1-5, hier S.1.

5) 「近景小景・・・制作者たち①」朝日新聞 1997年1月8日付朝刊

6) かつての写実主義とは特に政治性・目的性を持つ点が異なる1960年代の文学傾向で、特にアイター・ヴェラースホフ、マルティン・ヴァルザー等の名が挙げられるが、この時期の作家は殆どがこの文学的傾向を持つと言われる。Vgl. Trommler, Frank: Die zeitgenössische Prosa 1: Aspekte des Realismus. In: Tendenzen der deutschen Gegenwartsliteratur. 2., neuerfaste Aufl. Herausgegeben von Koebner, Thomas. Stuttgart. 1984. (Kröner) S.178-214.

の、この国の具体的な社会的現実のことを指している。[...] この様な現実の捉え方が問題にするのは、極めて単純な、列挙し得る、日付を特定し得る、十把一絡げの現実である。それは、鈍感に事物の名前を挙げるデータの厳密さを問題にはするが、このデータに対する主観的な反応や省察の厳密さを問題にすることはない。この見解は、それが依然として文学に求めている主観の恣意的に虚構された物語と、この虚構された物語に必然的に適合させられ、それによって予め歪めた形で示されている社会的現実との乖離を見落しているのだ。[...] わたしが生きている世界の現実に関して言えば、私は事物の名を挙げたいとは思わない、私はただそれらを考え得ないままにしておきたくはない。私は自分の用いる方法で、それらの事物を認識可能なものとしたいのだ。」⁷⁾

ハントケはここで新写実主義の現実の捉え方が表面的、一般的、かつ一面的であり、その表現方法も事物の名前を挙げるだけで、事物の描写にはなっていないと批判しているが、同様の批判はユーゴ紛争に関するジャーナリズムの報道に対するハントケの批判にも見受けられる。

ハントケは、彼に対し批判的な立場からインタビューに訪れたStern誌の記者にこう述べている。「あなた方は中身の無いメディアロボットのようになって現地に行き、大体のところは既に初めから決まっているストーリーを持って帰って来るしかないのだ。」⁸⁾「私は今回の事態を恐れはばかっているのです。〈大虐殺〉、これはもう既に殆どスレブレニカを表わす決まり文句になってしまった。それは一種の無害化だと批判せざるを得ません。全く馬鹿げている。イツェホーカフランクフルトの文化的まぬけが〈大虐殺〉という言葉を使ったというだけで、もうそいつは正当だ、な

7) Handke, Peter: Ich bin ein Bewohner des Elfenbeinturms. Frankfurt a/M. (Suhrkamp, st56). 1972. S.24f. (以下Eと略記。)

8) Handke, Peter; Grüner, Gabriel: Vielleicht bin ich ein Gerechtigkeitsidiot. In: Stern. Nr.10, 29.2.1996. S44-50, hier S.47. (以下Sternと表記。)

どとは。」(Stern,47)ハントケが、かつての新写実主義に対する批判と同様の批判を今回のジャーナリズムの報道に向けているという点に、彼がジャーナリズムに対し一作家の立場から批判を加えていることが読み取れる。

ハントケは *Reise* に於いて、旧ユーゴスラビアの内戦に関する西側ジャーナリズムの報道が一様にクロアチアやムスリム人寄りに偏っている点を批判しているが、自らも一時ジャーナリズムの影響を受け、セルビア側を一方的に悪と決め付けていたことを告白している。(Reise,36ff.)つまりハントケ自身がジャーナリズムの報道によって意識操作されていたことになる。同様の事態を彼はベトナム戦争のパリ和平協定の際にも認識していた。「数日前、ある人がわたしに電話をかけてこう聞いた。〈ベトナムの休戦をどう思う?〉 [...] 私はベトナムについて、人の言わない独自の意見を言いたかったが言えなかった。そのため私は言おうと焦って、別の事について話した。多くの人々が同じような状況にあるのだろうか? いずれにしても私は、これが私個人の後退ではなく、新聞の読者であると同時にテレビの視聴者である私達に共通の問題であると思っている。私たちの〈個人的な見解〉は常に全くの非個人的なものとなっている。先ずもって言葉を伴わない関心が呼び起こされるが、これを言葉にすると、強要された、解説者の文体の態度表明になってしまい気持ちが消極的になり、自分自身に不満を抱くようになる。その後この無力さから攻撃性が生れる。この攻撃性は、私の個人的な日常の周囲の世界に向けられるので、今や真に〈個人的〉であり〈独自の〉ものとなる。これが私のベトナム問題である。」⁹⁾彼はこの後、主に人間の意識の変化に関連づけて彼のベトナム問題を述べていく。

9)Handke,Peter:Als das Wünschen noch geholfen hat. Frankfurt a/M. (Suhrkamp, st208) 1974. S.25f. (以下AWと略記。)

ここでハントケは自分独自の観点の重要性を強調して、「私のベトナム問題」(MEIN Vietnam-Problem)という表現を用いているが、彼はまたかつて新写真主義を批判した際にこうも述べている。「ついでに言うと、作家としての私には現実を示す事や現実を克服する事に興味はない。私にとって問題なのは、私の現実を示す事だ(たとえ克服するためではないにしろ)。」(E,25)作家としてのハントケにとって、「自分の」現実を示す事が極めて重要なのだが、Reiseに於いても「この問題を、私だけの問題を? [...]」(Das Problem, nur meines?, [...], Reise,30)という言い方で、この問題の捉え方が彼独自のもの、場合によっては彼一人だけの捉え方であることを暗に示している。ここで、Stern誌記者とのインタビューで彼が語った次の言葉を引用しておきたい。「私はこの四年半というものこの問題に興味を持ち続けてきました。ただ私はこう自問したのです。いつ書くべきか?自分は何が言えるのか?どのように書くべきか?それは恐ろしい停滞だった。そして私は自問した。そもそも私には書くことが許されているのだろうか?私の正当性はどこにあるのだ?私はジャーナリストではないし、ジャーナリストとして書くこともできない。具体的であると同時に心を解放してくれる何かを書きたい、というのが私の動機だったのです。」(Stern,46)ハントケのこの言葉は、ジャーナリストとしての立場からではなく、一作家としての立場からユーゴ紛争にアプローチせざるを得ない彼の状況をよく表わしている。

現実には複雑で矛盾に満ちたもの、という認識を以前から持っていた作家ハントケにとって、現実の一面のみを強調して押し付けるジャーナリズムの偏向報道は我慢ならないものであり、ジャーナリズムの強制する現実とは異なる、自分の見た現実を示す必要性にかられたことは十分に理解できよう。(Vgl. Reise,30) 実際ユーゴ紛争は加害者側と被害者側に色分けできるほど単純ではない。

ハントケはまた以前、言葉が現実を歪めて伝える可能性を指摘している。「しかしその際、言葉によってあらゆる事物が文字通り歪められ得るということを、考えはしない。既に言葉によって歪められた事物と今後歪められるであろう事物をいちいち数え上げる必要もあるまい。」(E,30)「ホットな事態について、十分吟味もしていない形式で書いたりすれば、このホットな事態は冷めきって、どうということもないものと化してしまう。」(E,34)これらの引用も新写実主義を批判する文脈で述べられたものだが、ユーゴ紛争の報道に関するStern誌記者とのインタビューで、ハントケは言葉を変えて全く同じ批判を繰り返している。「シュテルン：あなたのご自分の<形式意識>(Formgewissen)を引き合いに出していらっしゃいますが、言葉の形よりも事実の方がもっと重要ではありませんか？/ハントケ：その点に関して私はあなたとは全く意見が異なります。一つ一つの言葉は重要なのです。それぞれの言葉は、そのまま、異なる仕方、悪行と同じほどに重要なのです。私は、第一次世界大戦中に新聞を丹念に読み、そして新聞の目立たない悪辣さを集めてモンタージュを作ったカール・クラウスをいよいよ理解するようになりました。彼は、一つ一つの言葉が暴力に関与することを明らかにしたのです。平和は偏向した言葉によっては達成され得ないのです。それは厳密な、できる限り公平な言葉によってのみ可能となるのです。/シュテルン：旧ユーゴスラビアからのレポートの多くは同情する者達の怒りで書かれています。/ハントケ：そんな怒りなど当事者達に任せておきなさい。」(Stern,47)

最後の引用文中に「厳密な、できる限り公平な言葉」という表現が出てきたが、ハントケは戯曲『村々を巡って』(Über die Dörfer)の登場人物ノーヴァに「公平さは愛がなければありえないのよ」¹⁰⁾という台詞を語らせている。ここに一人の作家たるハントケとジャーナリズムの立場の違い

10) Handke, Peter: Über die Dörfer. Frankfurt a/M. (Suhrkamp, st1072) 1984. S.113 (以下ÜDと略記。)

が明瞭に現れている。この点を今後更に検討したい。

3. ジャーナリズムと民(Volk)とハントケ

ハントケはこれまでも複数の作品の中でジャーナリズムに対する批判的な態度を示してきた。そこでは特にジャーナリズムと、ハントケの言う「民」との関係が重視されている。この「民」が何を意味するのかは後程明らかにする予定である。

【村々を巡って】の女管理人の台詞には次のようなものがある。「誰もこの村の事なんか気にかけてはくれません。伝える価値のある事件が幾度ここで起こった事か知りません。私達のいるこの建築現場でも。一でもそれを記録しておく者など誰もいません。もう何も伝えられないのです。

[...] 新聞に時々私達の事が載ることもあります。事故か犯罪が起きた時に。それだってともかく大変な事なんです、本当に。私達はこうした記事をいちいち丹念に読みます。すると私達には村の名前が私達自身の名前のように輝いて見えるんです。前に一度ある人が、公共の名のもとにここを訪れた事があります。記録用のテープとカメラを持って。その人は私たちの事を嘆いて、そして私達にも自分達自身の事を嘆くよう期待していたのです。でも私達は新聞に載るなら違う形で載りたいんです。私達は誉めてもらいたいんです。もっと合った言い方をすると、私達のこの村を、その色と形を、賛美して欲しいんです。」(ÜD,28)この台詞からは、ジャーナリズムが「民」の負の面にばかり目を向け、「民」が認めて欲しいがっている正の面は全く無視している点が示されている。次の【問いの技法】のおち壊し屋の台詞もジャーナリストを批判する内容となっている。「へっ、遂に来やがったぜ、俺の追跡者どもがよ！その上、<著者>と名乗る、首領のなじみの顔がもう見えるぜ。あいつのためにも俺は永遠に逃げ続けなくちゃな。あいつは自分のルポルタージュのために俺を掴まえて

こんな風に質問攻めにしようってんだ。〈あなたの子供の頃の環境はどんなものでしたか？〉〈あなたはこれまで自分の母親とセックスする夢を見たことはありますか？〉〈第三次世界大戦が勃発した時どう思われましたか？〉奴は自分の同類と盛んに東西貿易をしてやがる。どこにでも指は突っ込むが体ごと体当たりする事は絶対にない。至るところ寄稿して顔を出しはするが、自分で出向く事は決してない。大陸を横断してパネルディスカッションに出たり、情報提供者のもとで調査をしても、俺の著者殿は決して満足しない。同時に、どうしたら俺の身の上を理解できるかと、絶えず脇の方で待ち構えてやがる。いや、ダメだ。たとえお前さんが毎日二十周の水泳をこなし、ランニングをし、既にペラペラの十二ヶ国語に更に三ヶ国語を身に着け、〈今日に於ける問いの意味〉というテーマで最近開かれた国際著作者会議でストーリー狩の準備をしたって、ダメだ。

[...] お前には俺を掴まえる事なんかできやしない！俺が目指すのは、誰も知らない、誰にも知られ得ない人間になることだ。」¹¹⁾ ジャーナリストが相手の事を根掘り葉掘り聞く一方で、相手の本質を全く理解できずにいる点をこの引用は明らかにしている。次の引用は『村々を巡って』の中の、建築労働者であるハンスが労働者仲間に作家である自分の兄グレーゴルを紹介する件である。「だがお前らは兄貴を信じていいんだぜ。兄貴は、記録用のテープを持ってお前たちの人生のストーリーと秘密を盗むような、どこの馬の骨とも分からねえ奴とは違うんだ。兄貴は違った風にお前たちの話を聞くかもしれねえ。それに兄貴は俺たちの仲間で、俺達とは気が合うんだ。」(ÜD,33)この台詞の中にも作家とジャーナリストの立場の違いが暗示されている。

これらの引用から、ジャーナリズムが「民」の負の面しか見ていない一

11) Handke, Peter: Die Kunst des Fragens. Frankfurt a/M. (Suhrkamp, st2359) 1994. S.114f. 本作は当初『問いの演劇 鳴音の国への旅』(Das Spiel vom Fragen oder Die Reise zum Sonoren Land, 1989)の題で発表され、後に改題されたものである。(以下 KF と略記。)

方、作家は「物を書くあの男はいつになったら俺に権利を再び返してくれるんだ？」(ÜD,55)と言う声に答え、ジャーナリストとは異なる立場から、即ち「民」の立場に立って書かねばならない、というハントケの考えが窺われる。作家はジャーナリストの見ようとしなない「民」の正の面を描き、民にその「権利」を再び与えなければならない。

この様な考えは次の言葉にも見られる。「全ての者達が再び見出される事を待ち望んでいた。そうして、つまり見出されないままでは、彼らはただ見せかけだけ生きているに過ぎず、自分自身を余計な荷物とみなし、ただ引きずっていくしかなかったのだ。彼らはちゃんとした、地上の救いを必要としたのだ。<全ての存在は、違う読み方をしてくれ、という叫びなのだ。> [...] 作家よ、最後の力を振り絞って人間の尊厳を描き出せ。」¹²⁾

またハントケはその決意を、1975年5月15日のオーストリア主権回復二十周年記念式典での演説で明確に述べている。彼は、米・英・仏・ソの四カ国共同管理国の支配が終った後も、彼の家族も属していた社会の下層民、生きていると言うよりは何とか生き長らえているというような全ての人々にとっては、物質的窮乏、宗教の冷酷さ、伝統の暴力、役所の残酷なわざとらしさという別の管理国が依然として支配しているとした後で、次のように語っている。「私はよく [...] この多様性を持った国で生きながら埋められてしまった全ての命を思います。彼らは、例えば私のように、多少なりともこの国から自由になるという幸運を持たなかったのです。私は作家になりましたが、彼らのために書くことが、私の彼らに対する義務であると、これまで以上に感じるようになりました。私には書くという方法しかありません。私は<水を得た魚のように>民衆の中を動き回らねばならない、と言われるような革命家ではないのですから。[...] 私はオー

12) Handke, Peter: Die Geschichte des Bleistifts. Frankfurt a/M. (Suhrkamp, st1149) 1985. S.8

ストリアを愛して...いません。国家を愛する事はできないからです。人間しか愛せません。[...]そして私は自分の仕事を通じて、この真の管理国家の殺人的な暴力を減じる手助けをしたいと思っているのです。」¹³⁾作家という職業を通じ、社会から様々に疎外され、忘れ去られた少数者である「民」にその権利を再び与え、生きる勇気を与えたいという気持ちが、今回はハントケにジャーナリズムの報道とは異なるセルビアの側面を描かせたといえる。先の引用にある通り、ハントケの愛の対象となり得るのは国ではなく、人間であり、しかも社会の関心の外に置かれ、忘れ去られ、虐げられている人々である。Reise に於いて彼の主に描いた対象が、セルビアの政治家等の公人や軍隊の行動ではなく、様々な意味で戦争の犠牲者であり、直接戦争に関してはいない人々のありのままの日常の姿であるというのは、彼の考えからすれば当然のことである。¹⁴⁾またハントケが Reise の冒頭部分で、西側のセルビア批判が繰り返されるようになって以来、自分の中に閉じ籠るようになった友人について言及しているのも(15ff.)、上記の点と関係があろう。

では、書くことによって彼はどのようにして「民」に再び権利を与えようとするのかを以下に論じたい。これはハントケの表現方法に深く関る問題である。

4. 団結のための提案

ハントケの執筆の際の基本姿勢と言うべきものが、1973年に彼がビューヒナー賞を授賞した際の演説原稿の中に読み取ることができる。彼はそこ

13) Handke, Peter: Das Ende des Flanierens. 2. Aufl. Frankfurt a/M. (suhrkamp, st679) 1982. S.56ff.

14) 千田氏も「ユーゴ紛争」の序文でこのように述べている。「<〇〇民族が悪い>という書き方はしていない。悪いのは民族ではなく、民族主義を愛好し、戦争をすすめた指導者たちである。強制的に動員され、戦場で人間を救させられた兵士をふくめ、圧倒的多数は犠牲者だ。どの民族の指導者にもっとも責任があるか、だれが戦争で利益を上げているのかは、別の問題である。」尤も、千田氏の記述方法はハントケのそれとは当然のことながら全く異なっている。S.4

で何年も前に、既にそこらじゅうに出回っている強制収容所の写真の一枚を見た時の体験を述べている。はじめは何等想起される事もなかったが、写真に写った人物が子供がよくやるように爪先を触れ合わせているのに気付いた時、それがきっかけとなって彼がかつて公権力に対して抱いていた不安や怒り、嫌悪が呼び覚まされた。その写真が彼自身の経験と深く結び付いたのである。そこで彼はこう述べている。「[...] そして [爪先を触れ合わせている両足を見たことで] 私にはまた、現象世界を常に極点までもって行こうとするありきたりの概念を通じては気づく事はできなかつたであろう知覚が可能となった。私は概念を解体する、そしてそれゆえ未来に力を持つ詩的思考の力を確信した。[...] 私は答える。執筆の際に概念のほんの兆しでも現われたならすぐさま、—まだ可能な場合には—私は違う方向へ、未だ概念による安堵感と全体性の要求の存在しない風景へと逃れるのだ。そしてこの概念というものはあらゆる執筆行為の際何よりも良くないものと考えられる。[...] 私が誰かに同情や社会に於ける心遣い、親切心や忍耐を教えようとする時には、私は西欧の論理でその人に違和感を与えたりせずに、私自身がかつて同じような状況にあった事を話して聞かせようとする、つまり、私は思い出そうと努めるのだ。」(AW,75ff.)

彼は自らの体験を通し、個々の事例を具体的に描き出すことで、読者に訴えかけようとする。現実を概念的に抽象化し、クロアチア・ムスリム人とセルビアを対置させた上で、セルビア側を単純に悪と決めつけることも、逆に全面的に善と決めつけることもハントケにはできない。

ところで、ハントケは四部作(*Langsame Heimkehr*; *Die Lehre der Sainte-Victoire*; *Kindergeschichte*; *Über die Dörfer*)以後80年頃から「形」(Form)という言葉を盛んに用いるようになるが、この「形」と「民」との関係を考察したい。

ハントケが、いかにして自分の作品をまとめるべきか、またどこに自分と読者の接点を、自分が書く正当性を見出すべきか悩み、解決を見出そうと努力していた頃の様々な体験が、『サント・ヴィクトワール山の教え』に描かれているが、その中に次のようなものがある。「遠くの尾根の窪みが徐々に私の中に現われ、**旋回点**となって力を及ぼし始めた。[...] 丘の頂の上空の青は暖かくなり、そして休閑地に接する赤い泥灰岩の砂は熱くなった。その隣の森の部分では密集した松の集団があらゆる濃さの緑で、枝々の間の暗い影の帯は世界に広がる傾斜地の住宅地の窓の列となった。そして今や森の木々全てが一本一本はっきり見え、永遠の独楽となって直立したまま回転していた。その独楽と共に森全体が（そして巨大な住宅地が）回転しながら直立していた。[...] そして私は言葉の王国が自分に開かれた事を知った。一形という偉大なる精神によって。保護のベールによって。傷つけられる事のない、間の時間によって。[...] そして私はこれら全ての事物の構造が自分の中に存在する事を感じた。私の武具として。大勝利！と心で叫んだ。—あたかも全てが既に首尾良く書かれたかのようであった。そして私は笑った。」¹⁵⁾この引用の前半に述べられている体験は、見る対象が単なる観察の対象ではなく自分の一部になる、と『回り道』で説明されている「エロチックな目」（erotischer Blick）と全く同じものであるが¹⁶⁾、ここでは特に、ある形があらゆる事物に内在し「私」の中にも存在する、と述べられている後半部が重要である。彼はこの時、自分の作品を統一し、自分と読者（鑑賞者）をつなぐもの、即ち「形」を見出したのである。同様の内容を鑑賞者の側から述べた文章が次の引用である。（尤も書いているのは作家ハントケ自身だが。）これは『村々を巡って』の女管理人の台詞である。「想像の瞬間が訪れたのです。[...]」

15) Handke, Peter: Die Lehre der Sainte-Victoire. Frankfurt a/M. (Suhrkamp, st1070) 1980. S.89ff. (以下 LSV と略記。)

16) Handke, Peter: Falsche Bewegung. Frankfurt a/M. (Suhrkamp, st258) 1975. S.58

するとこの辺り一帯にあの芸術家 [かつて村に住んでいた彫刻家] が偏在し、事物を統一し、谷全体に彼の輪郭を与え、幸せな取るに足りないこの私に息吹を与え無垢のマントで包み込んだのです。あなたの目の前にいる、この何年もの間アルコールなしではやっていけなくなっている私ですら、そのマントを心を軽くしてくれるものとしていまだに、度々自分の肩に感じているのです。」(ÜD,27) 鑑賞者の想像力が刺激されて働く瞬間に、鑑賞者と芸術家とその他の事物に内在する「形」が把握され、三者がつながる。これは先に引用した強制収容所の写真を見た時の、鑑賞者の立場にあったハントケの経験と本質的に同一のものである。このように「形」は様々な事物を統一する機能を有するが、それが具体的にどのような意味を持つかが次の引用に示されている。これは『サント・ヴィクトワール山の教え』の「私」が間道の上に付いた桑の実の果汁のしみを見た時に、かつて1971年の夏旧ユーゴスラビアで見た桑の実の果汁を思い出し、それと共に当時感じていた喜びをも思い出した経験を述べた件である。「なぜ私は、書くための正当性、などと言うのだろうか？—その時漠然とした愛の瞬間が訪れた。この瞬間がなければ本来書くという行為はない。[...]—その時同時にあらゆる個々の事物が完全にそして明確に現われた。更に沈黙が訪れ、その沈黙と共に通常の自我が全く名を持たぬ者となり、そして私は、突如変身して、単に目立たぬという以上のもの、即ち、作家となった。／そう。この薄暗い間道は今や私のものとなり、名づけ得るものとなった。この想像の瞬間（この瞬間にのみ私は完全に私自身にとって現実のものとなり真実を知るのだ）が土の上の桑の実の果汁と私自身の生の断片を無垢の中で統一したばかりか、他の見知らぬ生と私の新たな親近性をも私に知らしめ、漠然たる愛となって、この愛を忠実に伝える形！にして伝えたいという欲求と共に、力を持ったのだ。私の決して規定し得ない、隠れた民の団結のための正当な提案として、我々の共通の存

在形態として。心を軽くする、快活にする、大胆な執筆の義務の瞬間だ。」(LSV, 57f.)様々な特色を持つ多種多様な個々の存在は、それぞれに内在する共通の「形」、即ち「共通の存在形態」によってつなぎ合わされ、統一され得る。この共通の「存在形態」は言い換えれば「団結のための提案」でもある。ハントケにとっては、彼の「隠れた民」を個々の特色・独自性を損なうことなくつなぎ合わせるこの「形」、「共通の存在形態」を見出し、伝えてゆくことが作家としての義務であり、「書く正当性」を与えてくれるものなのである。

但しその「形」は抽象化した概念としてではなく、個々の事例や自らの（擬似）体験として、ある人々に共通する、広い意味での経験として具体的に表現されねばならない。以後の作品は多かれ少なかれ彼のこのような決意に則って書かれているが、その中から、とくに二例のみを挙げる。

約二ページにわたって脱穀の共同作業の様子を描写した後、ハントケは以下のように作業後の人々の様子を描いている。「もうもうたる埃がおさまる間、膝をぐらつかせ、よろめき、ふらつきながら、尤も既に若干ふざけて行ってはいたのだが、私達は戸外の中庭へ集まった。私達の足や腕には引っ搔き傷が付いていた。穂の細い毛が髪のコ毛や、手や足の指の間に挟まっていた。しかしこの光景で最も長く印象に残るものといえば私達の鼻の孔である。埃によって、灰色になるどころか真っ黒になっていたのだ。男達も、女達も、そして私達子ども達も。そうして私達は一私の思い出の中では常に戸外で午後の日差しを浴びて一坐っていた。そして話をしながら、或は黙ったまま共通の疲労感を味わっていた。ある者達は中庭のベンチに坐り、またある者達は車の轆に腰掛け、また別のある者達はずっと離れて既に漂白場の草の中において、この共通の疲労感によって実際に集合させられ、短いあいだ団結しているようだった。隣り近所の者達全ても、全ての世代も。疲労の雲が、靈妙な疲労が当時（次のわら束の積み込

み作業の開始が告げられるまで) 私達を一つにしていた。私が村の子供だった頃のこの様な、我々疲労感、といった光景はまだ他にもある。 [...] 当時、脱穀作業後の共通の疲労感の中で、私は一度自分が民 (Volk) というようなものの中にいる事に気がついた。私が後に祖国オーストリアで再三望みながらも、ますますそれが無い事に気づかされる事となった民の中に。後に生れた者達一人一人のまぶたに重くのしかかる、<全諸民族の疲労>と言ってるのではない。私が言っているのは、第二次大戦後の一つの、ある小さな民の疲労の理想像を指しているのだ。様々な階級や組合、団体、司教座教会参事会というその全ての集団が当時、私達村人同様くたくたに疲れて坐っていた。共通の疲労感の中で全く等しく、統一され、とりわけ洗い清められて。」¹⁷⁾ここでは脱穀作業後の疲労感が、作業に携った近隣の老若男女を、即ち一つの「民」を、性差、世代を越えて一つにつなぎ合わせる共通の「形」として示されている。と同時に、「共通の疲労感」が脱穀作業後の情景と、第二次大戦後の共和国の人々の姿を結び付けている。

「新米の現代的な女性実業家役が、中に入っているあれやこれやのもの、の形がはっきり見える透明な鞆を持って、書類を検討しながら歩き、同時に手にはアンテナを伸ばした携帯電話を挟んでいるが、それがすぐに地面に落ち、その後、彼女がいらいらしながらそれを拾おうと身を屈めると、続いて鞆の口がぱっと開いて中身が飛び出し、その後、彼女が不機嫌に怒って飛び出した中身を拾い集め、歩きだすと途端につまづき、彼女は不図そのことで漠然とした笑みを洩らし、その微笑みは彼女が歩きながら再び書類に没頭し始めるとはっきりしたものとなり、彼女が今度はいよいよ本格的につまづき、ぶつかり、危うく転びそうになり、苦痛と怒りの叫びを発した後、退場するころには微笑みは大きな笑いに変わる。」¹⁸⁾彼女と同

17) Handke, Peter: Versuch über die Müdigkeit. Frankfurt a/M. (Suhrkamp, st2146) 1992. S. 27ff.

じ経験を持つ者達、彼女の姿にある種人生の縮図を読み取り、自らの人生を重ね合わせる者達、また現実の生活の中で同様の場面を目にしたことのある者達等を、この場面が共感によって結び合わせる。この引用が収められている戯曲はこの様な短いシーンが数多く連なって成立している。

日常目にし体験される、何気ない経験・感情が無意識の中に深く刻み込まれ、後に同一の、もしくは類似した光景や経験を再度繰り返すことによって、それが再び、今度は純化された形で思い起こされ、現在の対象（人物等）に対する共感や同情を覚える。¹⁹⁾ハントケは正にこの当り前の現象を重視して、セルビアの「民」の日常の姿や、日常経験される事柄等をありのままに描いたのである。そのためには彼自身ができる限りその地の日常的なものを目撃し、経験して、後に思い出せるようにしなくてはな

18) Handke, Peter: Die Stunde da wir nichts voneinander wußten. Frankfurt a/M. 1992. S.31f.

19) ハントケはまた「反復のファンタジー」の中で次のように述べている。「永遠なるものは日々の移り変わりの中では常に最も目立たぬものだ。言い換えるなら、日々の移り変わりの中で最も目立たぬもの、それこそが永遠なるものなのだ。[...] 形而上的なものはそれ自体は把握する事はできないが、しかし偶然形而上的性質を帯びたものは日常性の中で把握し得るのだ。」

Handke, Peter: Phantasien der Wiederholung. Frankfurt a/M. (Suhrkamp, sv1168) S.10

またハントケはシュティフターの「石さまごま」の「水晶」の舞台となる村の恒久性について、「サント・ヴィクトワール山の教え」の冒頭で (LSV,9) 言及しているが、シュティフターは「石さまごま」の序文でハントケの考えに近似したことを述べているので、ここで一部引用する。「[...] われわれは人類のみちびきとなるおだやかな法則をみつけることにつとめたい。個々人の存立を旨とするもろもろの力が存在する。それらは、個々人の存立と発展に必要な一切のものを摂取し利用する。それらの力は個々人の存立を確保し、同時にそのことを通じて、万人の存立を確保する。[...] われわれはそのとき、弱いもの、抑圧されたものをたすけて、その人がひとりの人間として他の人間と並存しながら、人生の道を歩むことができるように、状態を回復してやる。そして、われわれがそのことをなすとげると、われわれの心は満足を感じる、われわれはわれわれ自身を、個々人として感じている場合よりも、はるかに高い、誠実なものとして感ずる。われわれは自身を人類ぜんたいとして感ずる。つまり、人類ぜんたいの存立を旨としてはたらく諸力があるのである。それらは個々人の力によって制約されるものではなく、むしろその反対に、それら個々人の力に制約を加えるのである。これが、人類ぜんたいの存立をめざしてはたらく諸力の法則である、それは正義の法則であり、徳の法則であり、各人が重んぜられ、敬われ、危害を加えられることなく他者と並存し、人間として、より高い行路を進み、隣人の愛と賞讃をかうようになること、また、すべての人間は他のすべての人間にとって一個の宝石であるゆえに、万人が宝石としてまもられんこと、を欲する法則なのである。この法則は人間が人間とともに住むところには、つねに存在し、人間が人間にたいして働きかけるばあいには、かならずあらわれる。[...] 上記の法則がもつとも確実に重心となっている場所は、なんといっても、主として、無数にくりかえされる日常茶飯の人間行為の中なのである。」

アーダルベルト・シュティフター：「水晶 -石さまごま-」 手塚富雄・藤村宏帆 岩波文庫 1993年11月16日 S.283-286

らなかった。それ故にこそハントケはStern誌の記者とのインタビューで次のような言葉を述べたに違いない。「畜生、なぜあなたは、任意の人々の背後を嗅ぎ回ったりせずに、ただボスニアのセルビア人地区に行き、どこかのバーに身を置き、そして自分がジャーナリストだという事を忘れてみようとは思わないんですか？」(Stern,47)

また、これまで検討した内容から、ハントケの言う「民」(Volk)とは、決して特定し得ないものであり、共通の存在形態、即ち、より厳密に言うとは、類似した経験・思い出によって、各自の独自性が損なわれる事なく、一時的に緩やかに結び付けられた集団である。決して血と土によって束縛されるものでもなく、他を攻撃するために団結するのでもない。彼の「民」の団結は疎外された現代人の孤独を癒し、心を慰めるための団結である。²⁰⁾Volk=全体主義・民族主義、という単純な図式に従ってハントケを徒に危険視するならば、それはあまりに短絡的であり、ハントケはまさにそのような単純化した物事の捉え方を無害化(Verharmlosung)と呼んで批判しているのである。

ハントケにとって旧ユーゴスラビアは、唯一故郷にいる感覚を抱かせるかけがえのない「現実の国(Ein Land der Wirklichkeit)」²¹⁾であった。また、各民族がそれぞれの民族の独自性を保ったまま融和して暮らしていたかつてのユーゴスラビアは、彼にとって理想の国でもあった。(NL, 43f.)その彼が各民族が共存した状態の復活を望むのはごく当然のことである。(Vgl. Reise, 61)ハントケがいつの日かかつてのユーゴスラビアに於いて各民族が融和して暮らしていた状態が復活することを願い、彼独自の視点と表現でReiseを書いたことを次の文章が明示している。「だがそんなこ

20)拙論「共通の存在形態としての問い -ハントケの『問いの技法』-」(岩淵達治先生古希記念論集「ドイツ演劇・文学の万華鏡」岩淵達治先生古希記念論集刊行会 同学社 1997年 S.127-140.) 参照の事。

21)Handke,Peter:Abschied des Träumers vom Neunten Land. Eine Wirklichkeit, die vergangen ist: Erinnerung an Slowenien. Frankfurt a/M. (Suhrkamp) 1991. S.15 このエッセイは1991年7月27日及び28日付の南ドイツ新聞に掲載された原稿に加筆したものである。(以下NLと略記。)

とは問題ではない。私の仕事は別のものだ。悪い事実さえ書き留めれば、もう正しい事になるのだ、とは。だが平和には、事実に優るとも劣らぬもっと別のものが必要だ。／今度は詩的なものを持ちだそうというのか？ そうだ、この詩的なものが、物事を曖昧にすることとは正反対の事を意味するのであれば。或は<詩的なもの>と言うよりも、つなぎ合わせるもの、包摂するもの、と言った方がいい。つまり、第二の共通の子ども時代をもたらす、唯一の和解の可能性としての共通の記憶を呼び覚ます刺激だ。／どのようにしてそれを為そうというのだ？ 私がここに書き記したものは、ある種のどうでもいような事柄を書き留めるという回り道を取った方が、主要な事実を叩き込む道を取るよりも、ずっと後々まで残る形で、あの共通の想起が、あの第二の、共通の子ども時代が目覚めるという経験に基づいて、ドイツ語を使う様々な読者と並んで全く同様にスロベニア、クロアチア、セルビアの様々な読者を想定して書かれたものだ。<あの橋のある場所では何年も板がぐらぐらしていたんだよ。>-<ああ、あんたも気がついてたかい？><教会の聖歌隊席の下のある場所を歩くと足音がよく響いたんだ。>-<ああ、あんたも気がついてたかい？>或は単に、この、我々全員が囚われている歴史や時局の饒舌から、比べようもなく生産的な現在へ目を向けさせるのだ。<ほら、雪が降って来た。ほら、あそこで子供たちが遊んでいる。>（気分転換の技術だ。本質に関する気分転換としての技術。）」(Reise, 133f.) 他の方向に目を向ける事が新たな可能性、新たな視点を獲得する可能性を意味する事は言うまでもないが、ハントケはジャーナリズムの画一的報道によって煽られた旧ユーゴスラビアの諸民族間の憎しみや怒りを和らげ²²⁾、民族間に融和をもたらしたいという思いで、ジャーナリズムによって押し付けられた画一的な視点から

22)ユーゴ紛争の引き金となった、旧ユーゴスラビアからのスロベニア共和国の独立のそもその原因は、西側のジャーナリズムがスロベニアの民族主義を煽った点にあるとハントケが見ている事が、NL から明確に読み取る事ができる。

人々を解放するため、ジャーナリズムとは異なる彼独自の視点と表現方法でこの問題を描いたのである。²³⁾

結語

上述の如く、ハントケに於けるGerechtigkeitは「セルビアの民」、いや寧ろ「かつてユーゴスラビアを構成していた全ての民」に対する共感・愛情に根差している。

Reise はまたハントケ自らが「何千もの中のひとつの可能性」(Stern, 48)と呼ぶように、戦争ジャーナリズムの報道と同様、現実のほんの一面を示したに過ぎないが、画一的な報道の提出する面とは異なる側面を示し得たという点では、同じくハントケの言うように、「極めて必要な、恐らくその上効果的な野次」(Stern,48)と呼び得るものである。

だがハントケはStern誌の記者を駅まで見送った際に立ち寄ったスタンドカフェでこう語ったと言う。「自分達の言葉を武器にした私達は、この恐ろしい戦争に対し全く無力なのではないでしょうか。」(stern,50)この戦争をねじ伏せたのがアメリカの圧倒的な軍力であったという事実は、人々の憎悪に支えられた戦争という暴力的な現実に対する、いわゆる文化人や言論人の無力さを見せつけている。

23)ジャーナリズムに対する批判が抑制され、専ら人々や土地の日常の姿の描写に紙数が費やされているという点では、本作よりも、本作の後に発表された補遺の方が、ハントケ自身の意図に適合しており、ハントケらしい作品であるといえる。Handke,Peter:Sommerlicher Nachtrag zu einer winterlichen Reise. Frankfurt a/M. (Suhrkamp) 1996.

„Gerechtigkeit“ bei Handke

Toshihiro Karino

In seiner Reisebeschreibung „Eine winterliche Reise zu den Flüssen Donau, Save, Morava und Drina oder Gerechtigkeit für Serbien“ warf Handke den Journalisten massiv vor, klischeehaft und einseitig über Moslems und Kroaten zu berichten. Er selbst wollte nur Alltäglichkeiten in Serbien schildern. Deswegen wurde er von den Journalisten vernichtend angegriffen. Was verbirgt sich in dieser Kontroverse?

Handkes Standpunkt ist ganz anders als der eines Journalisten. Nach Handke soll ein Schriftsteller den bedrängt lebenden Leuten ihr Recht und ihre Würde dadurch wiedergeben, daß er nicht wie ein Journalist nur das Negative ihres Lebens berichtet, sondern ihr Alltagsleben vergegenwärtigt. So schilderte Handke die kleinen Leute in Serbien freundlich und mit Empathie.

Zudem glaubt Handke, daß seine Aufgabe zu schreiben darin bestehe, eine gemeinsame Daseinsform für den Zusammenhalt ‚seiner‘ bedrückten Leute zu bieten, indem er durch seine Schrift sie an den Wert ihrer alltäglichen, gemeinsamen Erfahrungen erinnert. Deshalb hat er die alltäglichen Nebensächlichkeiten in Serbien geschildert.

Handke hielt Ex-Jugoslawien, wo mehrere Völker zusammengelebt hatten, ohne ihre ethnischen Besonderheiten zu verlieren, für ein ideales Land. Er versuchte, mit seiner Schrift ein ‚gemeinsames Erinnern‘ zu stiften, in dem sich die ex-jugoslawischen Völker wieder zusammenfinden können.

„Gerechtigkeit“ ist für Handke nichts anderes als „Liebe“ für seine bedrückten Leute, diesmal für die serbischen kleinen Leute, vielmehr für die ex-jugoslawischen kleinen Leute.

(立教大学非常勤講師)